

「屈原と楚辞」第三回

「離騷の前半」テキスト

2025-5-22 香取(神漢 A013)

離騷

(終りなき憂愁のうた)

屈原

訳は、ネット上の黒須重彦訳を一部修正。

「離騷」の前半(第一段〜九段)

第一段での名乗りの後、見捨てられた主人公(屈原)が、主君の無理解を嘆きつつも、自分の身の潔白を明かさんとして、さまざまに心の内を押し述べることに費やされる―現実世界への不信感と苦悩の表白。

主人公は、正しい血筋を受け継ぐ高貴な生まれであり、かつ高潔な魂を持っていたにも関わらず、讒言を信じ自分を理解しない君主に冷遇され、世間の汚辱に堪えず、この世に見切りをつけて天上世界へ旅に出る。

目次

- 第一段… 名乗り。正しい血筋を受け継ぐ高貴な生まれであり、かつ高潔な魂を持っていた。そして、役立つ時が来ぬことへの恐れの嘆き。
- 第二段… 自分は身の禍を顧かえりみず、ただ君王のことだけを考えている。
- 第三段… 懐王を正道に導こうとしたが、讒言により王が心変わりしたことを傷む。
- 第四段… 自分を含め、善人の栄えないのを悲しむ。
- 第五段… 前代の賢人にとつとり、高潔に生きたい。
- 第六段… 古聖人の重んじた道義のために、死を覚悟する。
- 第七段… 暫く退しばらいて修養しよう。身は八つ裂きにされても、あくまでも節を守ると誓う。
- 第八段… 姉が心配し、諫めることば。
- 第九段… 舜帝の霊前に行つて心の中を訴える。初心に変わらぬ不屈の信念を述べては、不遇の身を嘆いて落涙する。

「離騷」の前半はこの世の出来事であり、後半は天上世界の旅であり、滅びゆくものの美しさである。「長恨歌」も前半は玄宗と楊貴妃のこの世での出来事であり、後半は仙界での太真(楊貴妃)の思いであり、最終句は「此恨綿綿無尽期」である。白楽天は「長恨歌」の構成を考える上で、「離騷」の構成を参考にしたと思えてならない。(香取)

第一段

名乗り。正しい血筋を受け継ぐ高貴な生まれであり、かつ高潔な魂を持っていた。そして、役立つ時が来ぬことへの恐れの嘆き。

◆ まず己の美点長所を揚げ、次に月日の経緯、季節の転変の速やかさに感じて身の老境に入らんことを思い、懐王のその態度を改め善政をなさんことを望み、自ら先進の任に当たろうという。

◆ 最後の四句は季節の転換と秋の風物を叙べており、それがやがて嗟老に連なっており、ここに中国文学を貫く悲愁文学の萌芽を見る。悲秋の感傷は詩経にはまだ見られないので、楚辞に至ってはじめて文学の対象となる。

私はかの名高い高陽帝の子孫、今は亡きわが父の名を伯庸という。

生まれは寅年のよき月、時はまさに新春の庚寅の日であった。

父はこの生まれ合わせを見て、よき名をつけて下さった。

どこまでも正しく生きよとその名は正則、

将来この国を治める程の人となれと字は靈均。

私は生まれながらに美わしい性質と、

その上すぐれた才能を兼ね備えて持っていた。

あたかも香しい草、江離と辟芷とを身にまとい、

秋蘭をつないで身に帯びるかのように、

川の流れに置き去られるように、歳月が私の成長を待たないことを恐れ、朝には岡の上のかぐわしい木蘭の花を摘み、

夕には川の州の中、冬なおみずみずしい宿莽を採って節操を養った。

月日はたちまちに流れて、春かと思えば、すぐ秋が来る。

秋草のしおれるように、わがよき人（君主）も

老い朽ちることを恐れるのだった。

（注）●高陽帝…五帝の第二、顓頊の称号。楚国の始祖熊繹はその子孫。

●江離、辟芷、秋蘭（ふじばかま）、木蘭（こぶし）、宿莽…香草・香木の名。

帝高陽之苗裔兮，朕皇考曰伯庸。

帝高陽の苗裔、朕が皇考を伯庸と曰う。

攝提貞於孟陬兮，惟庚寅吾以降。

攝提孟陬に貞しく、惟れ庚寅に吾以て降り。

皇覽揆余於初度兮，肇錫余以嘉名。

皇覽て余を初度に揆り、肇めて余に錫うに嘉名を以てす。

名余曰正則兮，字余曰靈均。

余を名づけて正則と曰い、余を字して靈均と曰う。

紛吾既有此内美兮，又重之以脩能。

紛として吾既に此の内美有り、又之を重ぬるに脩能を以てせり。

扈江離與辟芷兮，紉秋蘭以爲佩。

江離と辟芷とを扈り、秋蘭を紉いで以て佩と為す。

汨余若將不及兮，恐年歲之不吾與。

汨として余將に及ばざらんとするが如く、年歳の吾と与にせざるを恐る。

朝搴阰之木蘭兮，夕攬洲之宿莽。

朝には阰の木蘭を搴り、夕べには洲の宿莽を攬る。

日月忽其不淹兮，春與秋其代序。

日月は忽として其れ淹まらず、春と秋と其れ代序す。

惟草木之零落兮，恐美人之遲暮。

草木の零落するを惟い、美人の遲暮ならんことを恐る。

(注)

●皇考…亡父の尊称。

●攝提…寅歳の異名。

●孟陬…年のはじめの正月。

●内美…美しい性質。

●脩能…すぐれた才能。

●汨…水流の速いさま。

●代序…代わるがわるに次ぐ。

●美人…よき人。君主を指すと解する。

第二段

自分は身の禍を顧ず、ただ君王のことだけを考えている。

◆ 懐王に対して、自分が先導して正道に導こうとするという。古代の聖王三后は徳が善美であったからこそ、賢人がその下に集まった。堯・舜は光大な徳で歩み、桀・紂は邪道で滅びた。自分は身の禍を顧みず、ただ君国の崩壊を恐れる。

わが君は何故に徳を備えた賢臣を愛さず、悪臣どもを近づけたもうのか、何故にその態度をいつまでもお改めにならないのか。

天下に向けて千里の馬を馳せさせたまえ、その時こそ先導をうけたまろうものを、

純美の徳を備えた三皇などの古の聖王は、

真に優れたあまた賢臣たちを従えていた。

あたかもそれは、芳香放つ申椒や菌桂が入りまじり、香り高い蕙や菝をその身にまといつけているかのようにだった。

かの聖王の堯・舜の徳の光明正大なることよ。

彼等は皆道理に従って正しく歩んだのだ。

かの桀王・紂王とが暴虐の狂おしいことよ。

彼らはただ邪道ばかりをいそいだのだ

思うに徒党の悪人どもは楽しみを貪り、

道理に悖る暗く狭い路にわが君を誘い入れた。

何で私はわが身の災いを憚ろう。

わが君の御車のくつがえるのを恐れるのだ。

注

● 申椒…山椒の一種。● 菌桂…香木。● 申椒・菌桂…すぐれた人材を喩えている。

● 蕙、菝…香草の名。善良な人物の喩え。

● 桀王…禹による夏王朝の末王、暴君。● 紂王…殷王朝の末王、暴君。

不撫壯而棄穢兮，何不改乎此度也？
 壯を撫して穢を棄てず、何ぞ其れ此の
 度を改めざる。

乘騏驥以馳騁兮，來吾道夫先路也！
 騏驥に乗りて以て馳騁し、來れ吾夫の
 先路を導かん。

昔三後之純粹兮，固衆芳之所在。
 昔三後の純粹なる、固に衆芳の在りし
 所なり。

雜申椒與菌桂兮，豈惟紉夫蕙芷！
 申椒と菌桂とを雜う、豈維だ夫の蕙芷
 を紉ぐのみならんや。

彼堯舜之耿介兮，既遵道而得路。
 彼の堯舜の耿介なる、既に道に遵いて
 路を得たり。

何桀紂之猖披兮，夫惟捷徑以窘步。
 何ぞ桀紂の猖披なる、夫れ唯だ捷徑以
 て窘歩せり。

惟夫黨人之偷樂兮，路幽昧以險隘。
 惟うに党人の偷樂せる、路は幽昧にし
 て以て險隘なり。

豈余身之殫殃兮，恐皇輿之敗績！
 豈余が身の殃を憚るならんや、皇輿の
 敗績せんことを恐るるなり。

注)

● 騏驥…駿馬、一日千里を行く。 ● 馳騁…思う存分に駆けさせる。

● 三后…后は君。夏の禹王、殷の湯王、周の文王。

● 猖披…乱れてしまりのないことをいう。

● 捷徑…近道。 ● 窘歩…急いで歩む。

● 党人…なかまを組む人。 ● 偷樂…かりそめの楽しみにふける。

● 幽昧…暗い。道理が明らかでない。 ● 險隘…けわしくせまい。

● 敗績…車のくつがえることをいう。

第三段

懐王を正道に導くこととしたが、讒言により王が心変わりしたことを傷む。

◆奔走して君を善導しようとしたが、君は靈均の中情を察せず、讒言を信じて怒った。忠諫がとがめを招くことを知りながら、やめることができない。天に「予、勝手、ただ君のために忠誠をつくすだけであった。靈均は退けられるのをいやだと思わない。ただ君主の心変わりを残念に思うだけである」という。

そこで意を決して奔走して、御車の前後にそい、先王のただしき遺業を追わそうとしたが君はわが心中を察したまわず、かえって悪人どもの讒言を信じて激怒された。もとより諫言すれば、恨みをかうことは知っていたが、みすみす棄てておけなかった。九天を指して私は誓う、これもただ靈脩のあなたのためなればこそと。君は日暮れに会おうと約束しながら、ああ途中で路を変えてしまわれた。初めに私と誓っておきながら、後には悔いて心をほかに移された。かくて追放の身となったが、誰をも怨みはしない。ただ君の度々の心変りに心を痛める。

注) ●靈脩：すぐれて徳の高いこと。君主をさす。

忽奔走以先後兮，及前王之踵武。

忽ち奔走して以て先後し、前王の踵武に及ばんとす。

荃不察余之中情兮，反信讒而齋怒。

荃余の中情を察せず、反って讒を信じて齋怒す。

余固知謗譽之爲患兮，忍而不能捨也。

余固より謗譽の患いを為すを知るも、忍んで舍むこと能わざるなり。

指九天以爲正兮，夫惟靈脩之故也。

九天を指して以て正と為す、夫れ唯だ靈脩の故なり。

曰黄昏以爲期兮，羌中道而改路。

黄昏以て期と為さんと曰い、羌中道にして路を改む。

初既與余成言兮，後悔遁而有他。

初め既に余と言を成ししも、後に悔い遁れて他有り。

余既不難夫離別兮，傷靈脩之數化。

余既に離別を難らざるも、靈脩の数々化するを傷む。

注) ●踵武：足跡。●荃：香草の名。ここでは、君主（懐王）を喩える。

●齋怒：火のように怒る。

●謗譽：言いつらいことを言う。

第四段

自分を含め、善人の栄えないのを悲しむ。

◆靈均が香草を植えて、繁るを待って刈るり取ろうと願ったのに、それが花咲かずに荒れてしまったのを悲しむ。努力して養成した善人が退けられ、悪人がはびこる。自分をふくめて善人の栄えないのを悲しむのである。

私はこれまで蘭を九畹も植え、蕙を百畝も植えておいた。

留夷と掲車などの香草を畦にわかち、杜衡と芳芷をまじえて植えた。

その枝葉の盛んに茂るのを翼い、時をまつて刈ろうと願ったのに、冬に枯れしおれても傷みはせぬが、雑草でかれら芳草の荒れゆくさまが哀しい。

注)

●畹…三十畝の称。

●畝…二百四十歩。歩は六尺四方。

●留夷、掲車、杜衡、芳芷…香草の名。

余既滋蘭之九畹兮，又樹蕙之百畝。

余既に蘭を滋うることに九畹に、又蕙を樹うることに百畝なり。

畦留夷與掲車兮，雜杜衡與芳芷。

留夷と掲車とを畦にし、杜衡と芳芷とを雑う。

冀枝葉之峻茂兮，願俟時乎吾將刈。

枝葉の峻茂せんことを冀い、願わくは時を俟って吾將に刈らんとす。

雖萎絕其亦何傷兮，哀衆芳之蕪穢。

萎絶すと雖も其れ亦何ぞ傷まん、衆芳の蕪穢するを哀しむ。

注)

●峻茂…盛んに茂る。

●蕪穢…草茂り荒れること。

第五段

前代の賢人にのっとり、高潔に生きたい。

◆衆人が営利を求めて嫉妬しあうが、靈均自身は、このままでは老年まで名の聞こえることがないであろうことを恐れる。そこで春は木蘭の露、秋は菊の花を食して、心身を高潔に修養し、香木や香草の服飾も世俗と異なり、前代の賢人にのっとり、今の人に合わずとも、古の彭咸ほうかんの残した法則に従いたいと願うのであった。

衆人は皆争って利をむさぼり、満ちてもなお飽かずに求める。

ああ己おのれが心で人を推し量り、おのおの心を燃やして嫉妬しつとするのだ。

彼らはいそがしく馳はせめぐって名利を追うが、

それは私の急務とするところでない。

老いがだんだんせまってくるのに、

この身が汚名をきたまま朽ち果てるのを恐れる。

朝には木蘭の滴したたる露を吸い、夕には秋菊の散る花片をくらう。

わが心が信まことに美しく固く操り守るがゆえに、

いかに飢えやつれていても何をか傷もう。

木蘭の根を採って菑しを結び、

香りよい薛荔せつれきの花びらを数珠・蕊ずいを貫きとめ、

菌桂きんけいの香木を矯ためて蕙けいにつなぎ、

香豊かな胡繩こじょうを美しく繩なに縋なって腰に佩おびる。

ああ私は前代の賢者に倣なおうとするが、

それは世俗の人の生き方とは異なる。

今の人には合わずとも、願わくば賢人彭咸の遺法に従いたい。

注)

● 菑：香草の名。

● 薛荔、菌桂：香木の名。

● 彭咸：屈原が崇拜していた古代の賢人。

衆皆競進以貪婪兮，憑不厭乎求索。

衆皆競い進みて以て貪婪なり、憑つれども求索に厭かず。

羌内恕己以量人兮，各興心而嫉妒。

羌内に己を恕して以て人を量り、各々心を興して嫉妬す。

忽馳驚以追逐兮，非余心之所急。

忽ち馳驚して以て追逐すれども、余が心の急とする所に非ず。

老冉冉其將至兮，恐脩名之不立。

老冉冉として其れ將に至らんとす、脩名の立たざらんことを恐る。

朝飲木蘭之墜露兮，夕餐秋菊之落英。

朝には木蘭の墜露を飲み、夕べには秋菊の落英を餐らう。

苟余情其信姱以練要兮，長願頡亦何傷。

苟くも余が情其れ信に姱しく以て練要ならば、長く願頡するも亦何ぞ傷まん。

擊木根以結菑兮，貫薜荔之落蕊。

木根を撃りて以て菑を結び、薜荔の落蕊を貫く。

矯菌桂以紉蕙兮，索胡繩之纏纏。

菌桂を矯めて以て蕙を紉ぎ、胡繩の纏纏たるを索にす。

謇吾法夫前脩兮，非世俗之所服。

謇吾夫の前脩に法る、時俗の服する所に非ず。

雖不周於今之人兮，願依彭咸之遺則。

今の人に周わずと雖も、願わくは彭咸の遺則に依らん。

(注)

●貪婪…むさぼる。

●馳驚…むやみに駆ける。

●冉冉…だんだんと順序を追うさま。

●練要…すぐれた操守があること。

●頡頏…面(おも)やつれして黄色になり痩せる。

●纏纏…紐や縄が長く美しいさま。

●前脩…前代の賢者。

●脩名…脩は修、善。

第六段

古聖人の重んじた道義のために、死を覚悟する。

◆靈均は、人生の多難を悲しみ、朝に諫めて、夕べに棄てられた不遇を嘆くが、それでも節を守って、九死にも悔いず、君側の佞人や醜悪な世俗の、道義も法則もなく、ただ迎合を事とするのを憤り、死すともこの媚態はできないといつて、古聖人の重んじた、道義のために死ぬ覚悟をするのである。

長く溜息をついて涙を拭い、人生の多難を哀しむばかり。

身を潔くつつしんでも、ああ朝に諫めて夕方に棄てられた。

潔い高い蕙の帯をするゆえに私を棄て、

香り高い芷を採るゆえの罪もこれに重なった。

だがそれは私の信条、心の善とするところだ、

九たび死すとも悔いはせぬ。

怨むらくは君が心のとりとめなく、いつとても人の心を察したまわぬ。

近臣を女に喩えれば、衆女は私の美貌を妬んで、

私を淫らな者と言いふらした。

まことに今の世俗の器用さよ、定規にそむいて仕方を変え、

繩墨に外れて曲げてゆき、競って人に媚びるのを法度とする。

くよくよと心憂えて佇んで、私ひとりがこの世に苦しめられる。

むしろすぐ死んで行方知れずになろうとも、

ああした態度はとるには忍びぬ。

猛禽は小雀と違い群をなさぬのは、昔からきまったことだ。

どうして四角と円とが合うものか、

行く道がちがえばどうして互いに相容れよう。

じつと堪えて志をおさえ、追放のとがめを忍び恥をこらえ、

清廉潔白を守って忠直に死ぬるのは、

もとより前代の聖王の重んじたところだ。

長太息以掩涕兮，哀民生之多艱。

長太息して以て涕を掩い、民生の多艱なるを哀しむ。

余雖好脩姱以鞿羈兮，謇朝諝而夕替。

余好く脩姱して以て鞿羈すと雖も謇朝に諝げて夕べに替てらる。

既替余以蕙纒兮，又申之以攬芷。

既に余を替つるに蕙纒を以てし、又之に申ぬるに芷を攬るを以てす。

亦余心之所善兮，雖九死其猶未悔。

亦余が心の善しとする所、九死すと雖も其れ猶お未だ悔いず。

怨靈脩之浩蕩兮，終不察夫民心。

怨むらくは靈脩の浩蕩として、終に夫の民心を察せざることを。

衆女余之蛾眉兮，謠諑謂余以善淫。

衆女余の蛾眉を嫉み、謠諑して余を謂うに善く淫するを以てす。

固時俗之工巧兮，偈規矩而改錯。

固に時俗の工巧なる、規矩に偈いて改め錯く。

背繩墨以追曲兮，競周容以爲度。

繩墨に背いて以て曲を追ひ、周容を競いて以て度と爲す。

忼鬱邑余侘傺兮，吾獨窮困乎此時也。

忼として鬱邑して余侘傺し、吾独り此の時に窮困す。

寧溘死以流亡兮，余不忍爲此態也。

寧ろ溘に死して以て流亡すとも、余此の態を爲すに忍びざるなり。

鷺鳥之不羣兮，自前世而固然。

鷺鳥の群せざるは、前代自りして固より然り。

何方圜之能周兮，夫孰異道而相安？

何ぞ方円の能く周わん、夫れ孰か道を異にして相安んぜん。

屈心而抑志兮，忍尤而攘詬。

心を屈して志を抑え、尤めを忍んで詬を攘わん。

伏清白以死直兮，固前聖之所厚。

清白に伏して以て直に死するは、固に前聖の厚くする所なり。

注) ●修姱：善美。 ●鞿羈：自分で自分の行動を規制する。 ●靈脩：君主を指す。

●浩蕩：とりとめのない。 ●謠諑：悪口をいいふらす。 ●周容：世人に合って受け入れる。 ●忼：心のうれえるさま。 ●鬱邑：気分がふさがり物悲しい。 ●

侘傺：憂えて立ちつくす。 ●鷺鳥：猛禽。 たか・わしの類。

第七段

暫く退いて修養しよう。身は八つ裂きにされても、あくまでも節を守ると誓う。

◆正直潔白でありながら退けられたので、靈均は暫く退いて修養しようと思う。そして、自己の精神を信じて、高い冠や美しい佩にその心を象徴し、昭質のまだ損なわれないのをたのしみとして、或いは四荒に遠遊したいとも思う。その場合もあくまで節を守って、身は八つ裂きにされても改変しないと誓う。

ゆく道をよく見分けずに来たことを悔い、ここで立ち止って私は引き返そう。私の車をふりむけてもと来た道をもどろう。迷いこんでまだ遠くへは来ぬうちに。わが馬を蘭の花、生うる沢辺に歩ませ、山椒かおる丘に馳せてしばし息もう。進み出て受け入れられず、思いがけなく尤めに遭うより、今は退いて、もう一度わが身わが心の元の衣服をととのえよう。

芰と荷の葉を裁って上衣にし、蓮の花を集めて下裳とし、どこまでも清らかに生きる。

人がこの心中を知るものが無くともよい、

蓮の花の香り高く、私の心さえ芳しければ。

すつくと高い冠をかむり、きららかな玉佩を長く垂れるのをほこらかに示そう。追放されて芳香と悪臭とが入りまじっても、わが清き美質はなお傷つけられぬ。ふと来し方かえりみて眺めわたし、まだ見ぬはるか遠い国々にあこがれる。

佩物をひらひらとて多く飾れば、芳香は菲菲として、

若き日にましていよいよ高い。

人みなそれぞれに好みあり、私はひとり潔らかさをいつも好む。

そのため身は八裂きにされても生き方を変えぬ、どうして私の心が懲りようか。

注)

●芰…ひし。

●荷…はず（蓮）。

●菲菲…芳が立ちこめるさま。

悔相道之不察兮，延佇乎吾將反。

道を相るの察らかならざるを悔い、
延佇して吾將に反らんとす。

回朕車以復路兮，及行迷之未遠。

朕が車を廻らして以て路に復り、行ゆく迷うことの未だ遠からざるに及ばん。

步余馬於蘭皋兮，馳椒丘且焉止息。

余が馬を蘭皋に歩ませ、椒丘に馳せて且く焉に止息す。

進不入以離尤兮，退將復脩吾初服。

進んで入れられずして以て尤めに離わば退いて將に復た吾が初服を脩めんとす。

制芰荷以爲衣兮，集芙蓉以爲裳。

芰荷を製して以て衣と為し、芙蓉を集めて以て裳と為す。

不吾知其亦已兮，苟餘情其信芳。

吾を知らざるも其れ亦已まん、苟に余が情其れ信に芳し。

高余冠之岌岌兮，長余佩之陸離。

余が冠の岌岌たるを高くし、余が佩の陸離たるを長くす。

芳與澤其雜糅兮，唯昭質其猶未虧。

芳と沢と其れ雜糅し、唯だ昭質は其れ猶お未だ虧けず。

忽反顧以遊目兮，將往觀乎四荒。

忽ち反顧して以て目を遊ばしめ、將に往きて四荒を觀んとす。

佩繽紛其繁飾兮，芳菲菲其彌章。

佩は繽紛として其れ繁く飾り、芳は菲菲として其れ弥いよ章らかなり。

民生各有所樂兮，余獨好脩以爲常。

民生各おの樂む所有り、余独り脩を好んで以て常と為す。

雖體解吾猶未變兮，豈余心之可懲。

體解せらると雖も吾猶お未だ變ぜず、豈余が心の懲る可けんや。

(注)

●延佇：久しく立ちつくす。 ●朕：わたし。

●蘭皋：蘭の咲く沢。

●岌岌：山の聳えるように高い形容。

●澤：臭の誤字。 ●昭質：清い美質。

●四荒：四方のはて。 ●繽紛：みだれ混じるさま。

●陸離：美しくひらめくさま。

第八段

姉が心配し、諫めることば。

◆靈均が常に節操を持して、そのために禍を招くのを心配して、姉が諫めることばである。夏の禹王の父鯀が、剛直な性格のために身を亡ぼしたのを引き合い出して、諫めるのであるが、靈均の節操に反対するのではなく、衆人から孤立して身を危うくすることを憂えるわけである。

姉が非運に泣く私にいろいろ気にかけて、くどくどと私を責めて曰うには、

「鯀は剛直ゆえに身を亡ぼし、ついに羽山の野で夭死したではないか。

おまえは何故そのように博学で、正直で好んで身を潔くして、孤高に生きるのか、ひとり美しい節操を守るのか。蕢・菘・菘のような雑草は部屋に満ちているのに、何故それらとうまくなじもうとしないのか。人々は家ごとに説いては歩けぬ、誰が自分の心を察してくれよう。世はこぞって相談相手を作るのに、なぜ孤立して私の言葉をきこうとせぬのか」と。

注) ●鯀：禹の父。

女嬃之嬋媛兮，申申其詈予，曰

女嬃の嬋媛たる、申申として其れ予を詈る。

「蘇婞直以亡身兮，終然天乎羽之野。

曰く、蘇は婞直にして以て身を亡ぼし、終然として羽の野に夭せり。

汝何博謔而好修兮，紛獨有此媵節？

汝は何ぞ博謔にして脩を好み、紛として独り此の媵節有るや。

蕢菘施以盈室兮，判獨離而不服。」

蕢菘施を以て室を盈てるに、判として独り離れて服せざる。

衆不可戸說兮，孰雲察餘之中情？

衆は戸ごとに説く可からず、孰か云に余の中情を察せん。

世並舉而好朋兮，夫何瑱獨而不予聽？

世は並びに挙げて朋を好む、夫れ何ぞ瑱独にして予に聴かざる、と。

注) ●女嬃：屈原の姉。●嬋媛：心引かれて思いわずらう。●申申：重ねるの意。●媵直：剛直。●博謔：博学。●媵節：美しい節操。●瑱獨：ひとりぼっち。

第九段

舜帝の霊前に行つて心の中を訴える。初心に変わらぬ不屈の信念を述べては、不遇の身を嘆いて落涙する。

◆姉の諫めを聞いて、霊均は古代の聖王を手本にして、わが行動の中正を保とうと考え、九疑山に葬る舜帝の所に行つて心の中を訴える。その神霊の前に陳べる三十二句の詞句は、すべて古の名君や暴君の成敗のあとであった。夏后啓以下、夏の桀王、殷の紂王、湯禹、周の諸王に至るまで、一一数えあげて論述し、暴君に対して直言して、そのために殺されたり、塩漬けにされた忠諫の士のことに思い至り、初心に変わらぬ不屈の信念を述べては、不遇の身を嘆いて落涙するのである。

先聖の教えによつて中正の道を求めようと、

概き憤りながら、古来の成敗のあとを数えあげ、

沉水・湘江を渡つて南に旅し、九疑山の聖天子舜帝の霊前に行つて、

次のことばを申し述べた。

「その昔聖王禹の子啓は、天上から九弁と九歌の音楽を楽しみ、

歴代の夏の王たちはたのしみにふけて放縦だった。

禍難をかえりみて後を凶ることなく、ついに羿のため、

太康の五人の子は家を失つて流離した。

太康から王位を奪つた羿は遊びほうけて獵に耽り、また好んでかの大狐を射た。

もとより乱行の最後をよくする者なく、宰相の寒泥がまたその羿の妻を奪つた。

寒泥が羿の妻に生ませた澆、身に頑強な力を備え、己が情欲を制しきれず、

日々にたのしんで我を忘れついに夏の相王の子少康にその首を失つた。

夏の桀王はつねづね道にたがい、そこでついに殷の湯王に誅殺の禍に遭い、

殷朝最後の紂王は忠臣を菹醢にし、殷朝はそのために長くつづかなかつた。

殷の湯王・夏の禹王は厳かに畏れつつしみ、

周の文王・武王は道を求めて違ふことなく、

賢才をあげ用い能者に官を援け、法度に従つて偏らなかつた。

皇天は公平で私なく徳ある者を立てて輔佐に置く。

およそ聖明で美德あればこそ、まこと天下の主となり得るのだ。つくづく夏殷周古今を思い合せ、天下のおもむく民の心の帰趨を見れば、不義で天下は用いられぬ、不善で人は従わせられぬ」と。

わが身は危うく死に近づいても、歩み来た道をかえりみて少しも悔いぬ。

相手を量らずわが信ずるところを強いて行えば、

昔の賢者も**菹醢**にされたものを、

しきりにすすり泣いて胸ふさがり、わが生まれた時の悪さを嘆くばかり。

茹と**蕙**をとって涕を拭えば、涙はしとどに襟を濡らした。

注)

●九弁、九歌：楽曲の名。●太康：夏王朝 禹、啓（二代）、太康（三代）。書経夏書「五子の歌」に記述あり。●羿：夏の時代の一部族、有窮氏の君。●菹醢：（人肉の塩辛。●茹：菜の一種。

依前聖以節中兮，喟憑心而歷茲。

前聖に依りて節中せんとし、喟き心に憑りて茲に歴えり。

濟沅、湘以南征兮，就重華而陳詞

沅湘を濟りて以て南征し、重華に就いて詞を陳ぶ。

啓《九辯》與《九歌》兮，夏康娛以自縱。

啓に九弁と九歌とあるも、夏康は娛しんで以て自ら縦にす。

不顧難以圖後兮，五子用失乎家巷。

難を顧みて以て後を圖らず、五子つ用て家巷に失えり。

羿淫遊以佚畋兮，又好射夫封狐。

羿は淫遊して以て佚畋し、又好んで夫の封狐を射る。

固亂流其鮮終兮，泥又貪夫厥家。

固に乱流して其れ終わること鮮し、泥は又夫の厥の家を貪る。

澆身被服強圉兮，縱慾而不忍。

澆は身に強圉を被服し、欲を縦にして忍びず。

日康娛而自忘兮，厥首用夫顛隕。

日々に康娛して自ら忘れ、厥の首用つて夫れ顛隕せり。

夏桀之常違兮，乃遂焉而逢殃。

夏桀の常に違える、乃ち遂に焉に殃に逢えり。

后辛之菹醢兮，殷宗用而不長。

后辛の菹醢にする、殷宗用つて長からず。

湯禹儼而祗敬兮，周論道而莫差。

湯禹は儼にして祗敬し、周は道を論じて差つこと莫し。

舉賢而授能兮，循繩墨而不頗。

賢を挙げて能に授け、繩墨に循いて頗かず。

皇天無私阿兮，覽民德焉錯輔。

皇天は私阿無く、民徳を覽て焉に輔を錯く。

夫維聖哲以茂行兮，苟得用此下土。

夫れ維だ聖哲にして以て茂行あり、苟に此の下土を用うるを得。

瞻前而顧後兮，相觀民之計極。

前を瞻て後ろを顧み、民の計極を相觀するに、

夫孰非義而可用兮？孰非善而可服？

夫れ孰か義に非ずして用う可けん、孰か善に非ずして服す可けん。

沾余身而危死兮，覽余初其猶未悔。

余が身を沾うして死に危なくも、余が初めを覽て其れ猶未だ悔いず。

不量鑿而正柄兮，固前脩以菹醢。

鑿を量らずして柄を正せば、固に前脩も以て菹醢にせらる。

曾歔歔余鬱邑兮，哀朕時之不當。

曾ねて歔歔して余鬱邑し、朕が時の当たらざるを哀しむ。

攬茹蕙以掩涕兮，沾余襟之浪浪。

茹蕙を攬りて以て涕を掩えど、余が襟を濡して浪浪たり。

(注)

●重華…帝舜。●佚畋…狩猟に耽る。●封狐…大狐。●泥…寒泥。羿の宰相。●澆…寒泥の子。●強圉…強壯多力。●顛隕…ころげげ落ちる。●后辛…殷の紂王。名は辛。后は君。●祗敬…つつしむの意。●私阿…ひいきにしておもねる。●茂行…立派な行為。●不量鑿而正柄…くさびの木を正しく削るのに似て、相手を考えずに諫める。●前脩…前世の賢人。●歔歔…すすりなきする。